2018/07/22
「悪とは何？」

■善と悪

「主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります。」（Ⅱコリント 3:17）

善とは神のことです。神は自由であり、自由とは制約を受けないことです。このように考えることで、悪とは何かがわかります。つまり、悪とは、自由を否定するもの、拘束・束縛するものなのです。

■悪の実体

「被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。」（ローマ 8:21）

私たちの自由を束縛して奪うものの頂点は死です。人は神に似せて造られましたから、本来神と同じ自由を持っていました。もともと死は存在せず、人は永遠に生きることができたのです。しかし、悪魔に欺かれて神と異なる思いを信じてしまった結果、人は神と一つである関係を失いました。永遠なる神との関わりを失った結果、人の自由は奪われ、制約され、死ぬものとなったのです。

この時から、人にとって自由とは現実ではなく可能性に変わってしまいました。この可能性が、私たちを不安にさせているのです。

命は永遠ではなく、どれくらい生きられるかという可能性になり、少しでも長く安心して生きたいという願いは、富の奪い合いや争いにつながりました。人が安心を求めるのは、不安があることの裏返しです。この不安は、自由が制約されたために生まれたものです。

また、人は本来、自由に愛し愛される存在でした。神はそのままで私たちを愛してくださり、私たちも抵抗なく神を愛することができました。愛するために見返りを求めることも、愛されるために条件をつけることもなかったのです。しかし、死によって神との結びつきを失い神が見えなくなったために、人は神に愛されている自分が見えなくなり、愛されていることがわからなくなりました。こうして自由な愛がなくなり、愛は、どれだけ愛されるかという可能性になってしまったのです。どうすれば愛されるか、どうすれば良く思われるか、この不安が愛されようとする競争を生み、憎しみやねたみを生みました。

つまり、自由が制約された結果、人は不安を覚え、悪の行動に走るようになったのです。このことがわからないと、悪に対して正しい対応ができません。

今私たちは自由が否定された世界に生きています。そのために、生きたくても生きられな

い、愛したくても愛せない、愛されたくても愛されないのです。この不安によって人は、犯したくないのに罪を犯し、自分はダメだと自分を否定してしまいます。そして、同時にまわりの人のことも否定してしまうのです。これが悪の力です。悪は私たちに、自分を否定し、他人を否定させます。

自由とは肯定することです。自分を肯定し、他人を肯定します。ですから聖書は、「裁いてはいけない、赦しなさい」と教えているのです。自分が悪いことをするからといって否定してはいけないし、他人を否定してもいけません。否定すると、ますます悪い方向に進むものです。教育現場でも、否定すると人は伸びないことは今や常識です。悪に加担しないとは、裁かないで赦すことです。

■悪の力が向かう先

人は本来神と同じ自由を持っていて、愛される喜び、永遠に生きる喜びを知っています。しかし、自由が否定されたために、どんなに頑張っても、愛は思い通りにならず、すべての人に死が訪れます。それでも必死になって生きること、愛されることを求めて生きているのですが、周りの人や親から否定されたりすると、つらくてしかたありません。

このつらさは、人を閉じこもる方向に向かわせます。悪の力は、あなたをあなたの中に閉じ込める方向に働くのです。誰もが、自分を覆い隠し、心の中に幾重にもとりでを築き、自分の中に閉じこもることを好みます。このとりでが自我です。人間にとって最も恐ろしいことは、自分の扉を壊して外に出ていくことです。外に出ようとチャレンジはするのですが、傷つくのが怖いのです。多かれ少なかれ、すべての人が閉鎖性を持っています。これが死の働きです。

私たちが自分の中に閉じこもる方法で、最も多く用いられるのは、怒りです。皆、怒っている人には近寄りたがりませんから、怒ることによってこれ以上自分に近づかないでくれとバリヤーを張っているのです。趣味に走るのも自分を守る行為です。自分が何をしているかに価値を見出して、それを自分自身だと思ってもらおうとすることで、本当の自分を見せずに済みます。自分の肩書に頼ったり、スマホによるコミュニケーションやSNSなどの中に閉じこもるのも同様です。また、少ない自由を謳歌しようと快楽を求めることも閉じこもりになります。快楽を追求することは依存に発展し、かえって快楽が自分を苦しめるものとなってしまいます。

結局私たちは、誰もが何かに閉じこもって生きています。ただ、その閉じこもり具合が、環境によって変わるだけのことです。悪とは、このような状況のことを指します。悪魔や悪霊という言葉から自分で想像したものを怖がる必要はありません。

■悪と戦う

悪に勝つことができるのは、自由しかありません。イエス様は「自由を得させるために来た」と言われました。私たちが本来持っていた、永遠に生き、自由に愛せる自由を取り戻さ

せるために、キリストは来たのです。悪にとって最大の敵とは自由です。
　私たちは、善が来ない限り、自分の中に悪があるかどうか気づくことができません。私たちに、自分の状況を気付かせてくれるのは、神の言葉です。悪は、善に触れない限り、表に出てくることはないのです。

> 「というのは、律法が与えられるまでの時期にも罪は世にあったからです。しかし罪は、何かの律法がなければ、認められないものです。」（ローマ 5:13）

　神の律法がなければ、悪に気づくことができないのですから、悪の最大の敵は、具体的には神の言葉です。私たちは神の言葉を通して、悪に勝つことができるのです。

> 「そういうわけで、ちょうどひとりの人によって罪が世界に入り、罪によって死が入り、こうして死が全人類に広がったのと同様に、――それというのも全人類が罪を犯したからです。」（ローマ 5:12）

　この御言葉の本来の意味は、「全人類に死が広がった結果、全人類が罪を犯すようになった」ということです。
　悪は、善に触れると反応して抵抗します。神のことばを聞くと、多くの人が「自由になれるなんてうそだ」と抵抗します。クリスチャンはクリスチャンで、「信じてもうまくいかない。自由になれるなんてうそだ」と抵抗し、反発し、つぶやき、つまずくものです。これらはすべて、私たちの中に悪があるためです。この解決方法は、神の愛を受け取ることです。神の愛を本当に受け取れば、悪から解放されます。

■神が殻から引き出してくださる

> 「イエスが陸に上がられると、この町の者で悪霊につかれている男がイエスに出会った。彼は、長い間着物も着けず、家には住まないで、墓場に住んでいた。彼はイエスを見ると、叫び声をあげ、御前にひれ伏して大声で言った。「いと高き神の子、イエスさま。いったい私に何をしようというのです。お願いです。どうか私を苦しめないでください。」それは、イエスが、汚れた霊に、この人から出て行け、と命じられたからである。汚れた霊が何回となくこの人を捕らえたので、彼は鎖や足かせでつながれて看視されていたが、それでもそれらを断ち切っては悪霊によって荒野に追いやられていたのである。イエスが、「何という名か」とお尋ねになると、「レギオンです」と答えた。悪霊が大ぜい彼に入っていたからである。悪霊どもはイエスに、底知れぬ所に行け、とはお命じになりませんようにと願った。ちょうど、山のそのあたりに、おびただしい豚の群れが飼ってあったので、悪霊どもは、その豚に入ることを許してくださいと願った。イエスはそれを許された。悪霊どもは、その人から出て、豚に入った。すると、豚の群れはいきな

りがけを駆け下って湖に入り、おぼれ死んだ。飼っていた者たちは、この出来事を見て逃げ出し、町や村々でこの事を告げ知らせた。人々が、この出来事を見に来て、イエスのそばに来たところ、イエスの足もとに、悪霊の去った男が着物を着て、正気に返って、すわっていた。」（ルカ 8:27-35）

聖書の出来事は、霊的な意味を読み取る必要があります。

「悪霊につかれていた」とは、自分を否定することに取りつかれていたということで、殻に閉じこもっていたということです。つまり、この男性は、私たちと同じなのです。私たちは、ここまでのことはしなくても、誰もが自分の中に閉じこもり、自分の世界の中で生きようとしています。私たちは、彼と同じです。

この男性はイエス様を見ると大声で叫びました。否定する思いは善に反応し、「このままでいいから、近寄らないでくれ」と反発します。歴史上、キリスト教が迫害されてきたのはそのためです。

私たちは、自分の世界に閉じこもって、このままでいいとあきらめていますが、神はそこから私たちを引き出し、自由にしようとなさいます。私たちはあきらめても、神はあきらめません。葛藤が生じている私たちに対して、神は、「否定された中で生きていてはいけない」「あなたは自由なのだから、閉じこもるのはやめて出てきなさい」と促し、私たちを殻から出して、自由にしてくださるのです。

■何度でも殻から出よ

「しかし、人が主に向くなら、そのおおいは取り除かれるのです。主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります。私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」

（Ⅱコリント 3:16-18）

私たちが自由を得るために必要なことは、ただ心を神に向ければ良いだけです。心を神に向けるとは、あなたの罪を神の前に言い表すことです。否定されて自由を選べず、人を愛せない、そういう罪を神の前に言い表すのです。

この世では、悪が公になるとバッシングされますから、自分の中に閉じこもらざるを得ません。しかし、神は「それでもあなたを愛している」と言われます。私たちの本心を告白する時、すべてを肯定してくださるのが神です。このような方は、神以外にはいません。たとえどのような状態であっても受け入れられ、それでも愛していると言われることによって、私たちは殻から出る勇気を得ることができます。こうして覆いが取り除けられて、私たちは自由になることができるのです。

ところが、きちんと覆いが取り除けられても、私たちは幾重にもとりでを築いているため

に、このことが何度も繰り返されます。別の殻に気づいたら、また心を神に向けてそこから出ればよいのです。こうして、私たちはますます自由になって、神と人とを愛せるようになるのです。

神の福音は、自由を得させるための福音です。悪とは、私たちを否定するものです。ですから、自分のことも、他の人のことも、否定しないようにしましょう。悪に加担しない生き方とは、自分のことも他人のことも否定しない生き方のことです。悪を行なってしまうのは、不安があるからです。私たちは、自由を奪われたという同じ不安を共有しています。同じ環境にいれば、自分も同じことをするかもしれないと考えるなら、誰のこともさばくことはできません。

人は、本来持っていた自由を否定されたことによって不安になり、自らを否定し、他の人を否定するようになりました。これが私たちを苦しめているのです。神は自由であり、私たちをそこからあがないだしてくださるのです。それが十字架です。イエス様の十字架は、あなたを否定しているのではなく、肯定するものです。「それでもあなたを愛している」という十字架を受け取り、自由を受け取って生きましょう。